

# Brugada 症候群 3 例における高時間分解能 ホルター心電図の検討

尾方美幸 日高百合子 河野満子 森山晶子 鈴木千代子 梅木一美

宮崎大学医学部附属病院 検査部

## 【はじめに】

加算平均心電図により記録される心室遅延電位(LP)は不整脈発現の基質の存在を示す微小電位として注目されている。しかし、単回検査では陽性検出率が低く、検査を施行する時間帯などが影響する可能性がある。

今回、我々は、Brugada症候群 3 例において高解像度サンプリングが可能なデジタルホルター心電計(Spider View )を用い、LPの経時的変化とSTの日内変動について検討したので報告する。

## 【方法】

Brugada症候群3症例をLP連続記録が可能なデジタルホルター心電計 Spider View (Ela medical 社製)を用い、ハイレゾリューション( $2.5\mu\text{V}$ ,1000Hz)記録により、QRSを250回加算平均し、30分毎にFQRS-D、RMS 40ms、LAS40 $\mu\text{V}$ 、のLPの各指標を計測し検討した。

## 【まとめ】

1. Brugada 症候群3症例における高時間分解能ホルター心電図の検討を行った。

2. 記録に用いたX、Y、Z双極誘導のうち、Z誘導心電図が視覚的に12誘導心電図のV1、V2誘導と最も類似し、Brugada症候群でのST変動の評価に適していた。
3. 3症例ともST上昇の程度および形態変化に著明な日内変動を認めた。
4. LPの計測は、夜間の記録においてノイズレベルが低い心拍が得られ、評価可能であった。
5. LPは3症例中、2症例で陽性となった。

## 【考察】

1. ホルター心電図におけるLP計測は12誘導心電図を用いた加算平均心電図に比べ、連続したLP計測と睡眠時の記録が可能であり、偽陰性率を低いものにできると考えられた。
2. Brugada 症候群においてLPは予後予測因子として重要とされている。自律神経変動の影響を過分に受けやすいBrugada 症候群において長時間評価可能な高時間分解能ホルター心電図は有用であると考えられた。

宮崎大学医学部附属病院検査部 0985-85-9400

(生理検査 尾方美幸)